

○連載「知的感動ライブラリー」(69)『聖職の碑』

新田次郎原作の映画『聖職の碑』(昭和53年東宝)

総合科学部教授 石川 榮作

1. 新田次郎の原作小説『聖職の碑』の成立過程

新田次郎『聖職の碑(いしぶみ)』は昭和51年3月に講談社より刊行された。その作品のあとに続いて「取材記・筆を執るまで」というかなり長い記録も掲載されており、それを読むと新田次郎がこの作品にかけた意気込みというようなものを読み取ることができる。読み応えがあって、これを読んでから、再度作品を読み返すと、その取材での体験が作品のあちこちで臨場感にあふれた迫真の描写となつて、さらにより深い感動を覚えずにはいられない。徹底した取材と、その現地調査から生まれる臨場感あふれる迫真の描写が、新田次郎の持ち前であり、特徴・魅力である。

新田次郎は明治45年(1912年)6月6日に長野県上諏訪町(現在の諏訪市)に生まれ、そこから見える伊那駒ヶ岳(2956メートル)で大正2年(1913年)に遭難事故があったという話は、小学生の頃から知っていたようである。その遭難事故というのは、大正2年8月26日、上伊那郡の中箕輪(なかみのわ)尋常(じんじょう)高等小学校の高等科2年生(現在の中学2年生にあたる)が修学旅行のため伊那駒ヶ岳に登っている途中、突然暴風雨(現在で言う台風)に襲われて、総勢37名のうち生徒10名と校長先生1名が亡くなってしまったというものである。新田次郎はのちに好んで山岳を舞台にした小説を書くようになってから、いつかはこの遭難について調べてみたいと思っていたが、本格的にこの遭難事故について資料集めに入ったのは、昭和49年(1974年)のことである。その頃から翌年にかけて、上伊那郡教育会による遭難報告書『駒ヶ岳山上における大惨事』や上伊那郷土研究会発行の「伊那路」に掲載の駒ヶ岳遭難五十年特集号(昭和38年12月)などを手に入れていたが、昭和50年前半は小説新潮に『銀嶺の人』を連載していたことから他の作品に取り掛かる余裕はなかったようである。その連載が終了し、気晴らしに出かけたヨーロッパ旅行から戻って来ると、本格的に駒ヶ岳遭難事故の調査に出かける決心をして、ついにその年の盆明けに講談社の若手編集者とともに長野県に取材に出かけたのである。

その取材の詳細なさまをここで一つ一つ述べる余裕はないが、新田次郎は地元の案内人をつけたうえで、駒ヶ岳ロープウェイで終点の千畳敷まで登ってからは自らも駒ヶ岳登山を体験しながら、大正2年8月に児童らが遭難にあった場所を一つ一つ確認していったのみならず、下山後には、当時の生存者やその親族、犠牲者の遺族などにも会って当時の様子を直接的・間接的に聞いたり、さらにはまたその地方の風土や社会・教育環境などについても詳細な取材を続けたようである。その徹底した取材ぶりには本当に驚かされる。しかもその取材が終わる頃には実際に台風6号が接近してきて、犠牲者の墓参りに出かけたときには暴風雨警報が発令されていたという。そのときの台風も新田次郎に小説執筆の強いインスピレーションを与えたに違いない。取材が終わって、東京に戻って来たら小説の構想を練っているうちに、諏訪中学校(現諏訪清陵高校)の同級生有賀剛氏から電話がかかってきて、彼が遭難当時の留守組の代表者有賀喜一の息子だと分かったのも、何か因縁めいていて、感動的である。これによって小説の表題にある「聖職の碑」建立の提案者が誰であったのかも明らかとなり、小説の骨格は出来上がったようである。こうして小説『聖職の碑』はその取材の年のうちに一気に書き上げられ、上記の「取材記・筆を執るまで」も書き添えられて、一緒に講談社より書き下ろし長編小説として刊行されたのである。

新田次郎はこの駒ヶ岳遭難事故を単なる山岳遭難とはしないで、当時長野県の教育会が直面していた実践主義教育と白樺派の理想主義教育の論争をも盛り込んで、架空の人物なども登場させながら、生徒と教師の心の触れ合いの内容に結び付けている。実践主義教育と理想主義教育、いずれの主義の教育であれ、究極的には教師が生徒と心から接して、生徒を教え愛することが大切であるとして、教師であることを「聖職」として捉え、美しくもあり、またときには厳しく陰しくもある山という自然に取り囲まれたこの長野の地にある高等小学校を舞台として生徒と教師との心の触れ合いを書いているところに、この小説の真の意味での魅力がある。

2. 新田次郎原作『聖職の碑』の映画化

このような内容の新田次郎の小説『聖職の碑』が刊行されると、たちまち全国から大きな反響があり、たくさんの手紙が届いたようである。その中には是非この小説を映画として鑑賞したいという手紙もあったが、その手紙の中では監督は前年に大ヒットした映画『八甲田山』の森谷司郎監督にしてほしいとの希望が多かったという。たちまち東宝のプロデューサーの方からもこの小説の映画化の話が持ち上がり、再び原作新田次郎と監督森谷司郎のヒューマンコンビによる映画製作が始まった。森谷司郎監督は昭和52年2月に厳寒の駒ヶ岳に初めて登り、寒風の吹き荒れる前岳の尾根に立って、「この映画を単なる悲劇に終わらせてはいけない、かつての悲しい出来事を痛烈に描くことによって、現代の私たちが人間として生きていくための、愛と勇気を与えてくれるような人間の讃歌にしたい、いや、しなければならない」（映画公開時のパンフレットから引用）と思ったようである。その年の春から夏にかけて、信州の美しい山と川に囲まれて、撮影は順調に進んだようである。撮影は『八甲田山』と同じ木村大作である。撮影隊の本格的な山の撮影は8月8日から始まり、ロケは2週間続いたが、晴れの日ばかりではなく、雨・霧の中での自然との壮絶な闘いの中での撮影もあったという。それだけに迫真の映像になっていて、映像表現として「素晴らしい」の一言に尽きる。こうしてこの映画は完成し、翌年の昭和53年9月に全国公開された。私はこの年に徳島大学に着任し、徳島市内の映画館でこの作品を鑑賞して、大いに感動したことを今でも覚えている。

3. 映画『聖職の碑』のあらすじと見どころ

森谷司郎監督の映画『聖職の碑』は、新田次郎原作の小説『聖職の碑』と多少異なる設定にしているところもあるが、全体的にはほぼ同じ展開と言ってもよいであろう。

1) 実践主義教育と理想主義教育

映画冒頭は原作と同じく、中箕輪(なかみのわ)尋常(じんじょう)高等小学校長赤羽長重(あかはねながしげ、鶴田浩二)が生徒たちと行列を作って駆け足をしているところである。ただもう一人の引率の教師が原作では樋口裕一であるが、この映画では清水政治(まさはる、三浦友和)となっている。目的地の福与城址に着いて、赤羽校長と清水教師がその福与城が武田信玄に占領されたときの歴史を生徒たちに語って聞かせる内容は、原作とほぼ同じである。野外で生徒たちに向かって「福与城は武田信玄に滅ぼされたとただ覚えるだけではなく、その歴史の陰には人間尊重の裏話があることを忘れてはならない」と教えず歴史講話は、現代の受験一辺倒の知識詰め込み教育に対する警告とも受け取ることができる。

この映画はこのように当時の信州での教育環境の描写から始まる。高等小学校長赤羽長重は日頃から実践主義教育を重視して「子供の心と身体を鍛える必要がある」と考え、高等科2年生のときには生徒に修学旅行として駒ヶ岳登山を体験させて、その登山による心と身体の鍛練こそ、子供たちの一生の糧になると信じていた。このところ毎日、野外での駆け足を繰り返しているのも、その登山の準備のためなのである。ところが、その当時、東京で発刊された雑誌「白樺」の影響を受けた理想主義教育が特に若い教師の中に広まりつつあった。人類愛、人間尊重、善意などを中心に据えた、いわゆる白樺派の理想主義教育である。教室でオルガンを弾きながら生徒たちと一緒に歌を歌っている伊吹やえ(中井貴恵)も、また裸体の女性の模型を生徒たちに見せて情操教育を行っている樋口裕一(田中健)も、さらには感受性を培う情操教育が必要だと主張する、中堅どころの有賀喜一(北大路欣也)も、まさにこの白樺派の理想主義教育に影響されていた。そうしているところに野外の駆け足から校舎に戻って来た清水政治もまた、その一人であった。これら若い4人の教師たちと、彼らの理想主義教育に多少の不安を覚えていた赤羽校長との間では、これからの教育に関して少しばかりの論争が展開されていく。赤羽校長は若い彼らが理想を追い求めるばかりに、つい転んでしまうことを警告するが、彼らは新しい教育を取り入れることを主張するのである。赤羽校長の実践主義教育と白樺派の理想主義教育との対立であるが、赤羽校長は自分の主張に凝り固まった、頑固一徹の教師ではなく、若い彼らの主張する理想主義教育とはいかなるものか、ひとまず理解しようと努める柔軟な心を持った校長としても描かれている。赤羽校長は雑誌「白樺」を読んでみようとする態度をとるところから、そのことが窺える。

ある日、樋口裕一が有賀喜一の指示に従って雑誌「白樺」を届けに赤羽校長の自宅(原作では自宅は少し遠いところであって、彼は学校の近くの家に単身赴任をしていることになっている)を訪ねたとき、彼は赤羽校長にもう一つの重大なことを相談する。赤羽校長は樋口裕一の様子からすでにそのことを察しており、校長の方から問い

質(ただ)したところによると、大地主の家に生まれた樋口裕一は自分の家の小作人の娘水野春子(大竹しのぶ)と「行きつくところまで行っている」という。二人の間にはやがて子供が生まれるところまで行っているというのである。このエピソードは、新田次郎が上伊那地方の風土や社会環境の取材をした折りに、大正2年当時は大地主と小作人とのトラブルは絶えなかったということと、このあたりでは製糸業が盛んであったということを知り、その小作人の娘を製糸工場で働く「工女」(こうじょ)として登場させ、その大地主の息子と小作人の娘の愛の話をここに取り入れたものと考えられる。この映画でもその原作を踏襲して、映像化している。この当時としては許されない身分違いの愛によって子供を身ごもったことを聞いた赤羽校長は、あきれはてたかたちで樋口裕一を叱り飛ばし、「俺は知らんぞ」と言いはしたものの、赤羽校長はなんとかしてあげずにはいられない。赤羽校長は妻つぎ(岩下志麻)を伴って水野春子の家を訪れて、すべては自分に任せてほしいと小作人の両親に伝えたのち、また日を改めて妻つぎとともに今度は樋口家を訪れて、水野春子を自分たちの養女として迎え入れたうえで、樋口家に輿入れしたいことを申し出るのである。赤羽校長とその妻つぎの人柄がよく描かれている場面である。ただ樋口家では現在、樋口裕一の叔父がヨーロッパに出かけているので、彼が戻って来てから、親族会議を開いてから返事をするようになった。これでその日の交渉はうまく進んだように見えた。妻つぎは夫を褒め称えようと、赤羽校長はこういうふうに対応できたのも、「白樺のおかげかな」と自らが口にしてはいる。いずれにしてもこの映画では原作と同じく赤羽校長は理想の人物として描かれている。

そのような赤羽校長の口にする台詞に感動しないではいられないのが、そのあと夫婦で川辺の岩の上にすわって、「信州はいいなあ」とこの土地のことを自慢し始める場面である。妻つぎが「山と川ばかり」だと言えば、赤羽校長はそれに続けて「だからいい子が育つ。ここに生まれてよかった。教育はむずかしくなってくるが、教師がしっかりしていれば、いい子は育つ」感動的な場面であり、あたりの美しい景色とともに、この映画の見どころでもあろう。

こうして中箕輪尋常高等小学校では、清水政治が生徒たちと野外で駆け足をしたり、その野外で講話をしたり、また樋口裕一は生徒たちを川に連れて行って、生徒たちと一緒に川に生息する生き物の観察をしている。野外ではそれぞれの教師が理想の教育をしているように見えるが、しかし、その頃校舎の中では郡からの視学(佐藤慶)が出し抜けにやって来ており、白樺派の理想主義教育者として名指して樋口裕一、清水政治、伊吹やえ、有賀喜一の4名を挙げて、これらの授業を参観したいと言い出していた。郡視学はとりあえず有賀喜一による図画の授業を参観することになる。有賀喜一は生徒たちに自分の左手をスケッチさせていたが、一人の生徒の作品を取り上げて、実物どおりに描くということよりも、この生徒のように心の中でそれを理解して、まったく新しいものを創り出すことの方が大切だと教え諭す。しかし、視学はそれをまったく理解せずに、有賀喜一は長いこと病気で欠勤していたことを取り上げて、上からの目線で理想主義教育の教師を軽蔑するような態度を取る。ここで有賀喜一は身体に病気をかかえていることが示されており、のちに病没してしまうことがほのめかされていると言える。

このような出し抜きの視学の訪問にとりわけ大きな怒りを見せたのが、清水政治である。赤羽校長が職員会議の席で高等科2年生の1泊2日の駒ヶ岳登山の計画を持ち出したとき、その計画の説明に入る前に清水政治が視学からはあらかじめ連絡があったのかと問い詰め、「出し抜きの視察は断ってください」と、郡教育会からの威圧的な視察に猛反対の姿勢を見せる。ここでまた赤羽校長と白樺派教師の間で実践主義教育と理想主義教育の論争が始まるが、この場面のやりとりも注目に値する。まず清水政治がこのような出し抜きの視察が続くと、また教科書棒読みでお茶を濁すような授業が増えてくることを心配する。これに伊吹やえが賛同するが、教師の中からは理想主義教育を推進する教師も反省すべきだという意見も出て、「子供をつけあがらせたり、はめをはずしすぎるといふ噂があったので視学が来たのだ」と言う。これに対して清水政治は「僕は自分の頭で考える子供を育てたくて、子供の中に飛び込んでいるだけだ」と反論すると、赤羽校長は若い清水政治を説き伏せるように言う。「頭だけが先走ったのでは駄目だ。高い理想や夢を与えることは確かに必要だ。しかし、世の中に出れば、子供の夢はすぐに壊される。それでもそれを撥ね返して、生きていける力を与えるのが教育だろ」これにまたもや清水政治は反論して、「そういう気迫は喜びを自覚していない子供からは生まれません。まずそれに目を開かせるのが始まりです」と言う。これを受けて赤羽校長は、「今回の登山はそういうことも全部含んでいる」と、視学訪問の話を打ち切って、次に登山の計画書の議論に入る。

日頃から赤羽校長の実践主義教育に心酔している征矢隆得(そやたかえ、地井武男)が、登山の下見をして、準備も万端整っていると説明しても、真っ先にこの登山計画に反対したのが有賀喜一である。彼は命の危険を冒してまで3000メートル近い山に登るのは暴挙だと主張するのである。この「暴挙」という言葉に赤羽校長は怒りを露

わにして、こう言う。「辛いことから逃げ回ることだけを教えて何が教育だ。苦しみや困難はどこにいたって起こってくる。子供は生まれついては強くも正しくもない。それを鍛え、困難を乗り越えて生きていける人間に育てるのが教育だ。思想も考え方も時代によって変わる。しかし、体験が人間を作るということは、変わらないのだ。言葉は古いが、私が鍛練主義を尊ぶのは、その意味だ」この言葉に征矢隆得は大いに賛同するが、有賀喜一は「その言葉からはすぐ行き過ぎが起ころうでしょう」となおも反論する。これに対して赤羽校長は昨年一昨年もこの登山を行って来て、生徒たちは感動の極に達したという感想を述べており、ただ辛かったと書いた者は一人もいなかったことを引き合いに出したあと、「子供は大きな自然に触れて素晴らしい展望を持って帰って来る」と締め括って、駒ヶ岳登山を計画どおり実施することを決定するのである。

その際、赤羽校長は清水政治と樋口裕一には是非とも同行してほしいと頼むが、清水政治は原作とは大いに異なっていて猛反対して、進退を考えるとまで言い捨てて、その場を立ち去る。恋仲にあると思われる伊吹やえがそのあとを追いかける。困り果てた赤羽校長は、悩み事が生じた場合にいつも相談している大先輩の片桐福太郎(笠智衆)を訪れて、「自分の見識をどんと示すことだ」という助言を受ける。笠智衆はほんの少しこの場面に登場するだけであるが、やはりその演技は見どころである。そのあと赤羽校長は清水政治を訪れて、腹を割って話そうとするものの、話は決裂に終わる。清水政治は翌日辞表を提出して学校を出て行こうとするが、生徒たちがそれを引き留め、生徒たちの顔を見て、ついに山と一緒に登ることを赤羽校長に伝える。

こうして清水政治は登山に参加することになったが、樋口裕一の方は叔父泰二郎(米倉斉加年)がヨーロッパから戻って来て、親族会議を開いたところ、その叔父の一言で小作人の娘水野春子との結婚は認められなかったとい、しかも樋口裕一が登山に出かけている間に春子を引き離そうと目論んでいるという。これを聞いた赤羽校長は樋口裕一には登山を止めて、春子と一緒に離れに隠れているようにと命じた。樋口裕一にとっては今こそ人生で一番大切なときだと判断したのである。

2) 駒ヶ岳登山

駒ヶ岳登山に出発する8月26日がやってきた。午前5時に登山参加者が校庭に集まった。赤羽校長、征矢隆得(そやたかえ)、清水政治の教員3名と青年会員9名、そして高等科2年生の生徒25名、総勢37名である。昨年まで登山の案内人を伴っていたが、今年は予算の関係で案内人は雇うことができなかった。これも悲劇の一因になるのだろうか。赤羽校長は飯田測候所に電話で天候の問い合わせをしたが、「北東の風、曇りにわか雨」という予報で、昨日問い合わせた予想と変わったところはなかった。午前5時35分、征矢隆得が隊列の先頭に立ち、清水政治が後尾を守り、赤羽校長が皆に聞こえるように腰に鈴をぶら下げて隊列の真ん中に入り、9名の青年会員は適当に生徒たちの中に入って、学校関係者や家族の者たちに見送られて、いよいよ出発した。林光の音楽が奏でられる中で、一行は美しい自然の山を登り始め、その途中の美しい自然もまたこの映画の見どころである。ただスクリーンではその美しい自然の中で一行の山登りのさまが映し出されるだけなので、途中で休憩をとった場所がどこなのか、詳しいことは分からないが、原作によると、一行は春日街道沿いの道を歩いて、午前7時に南箕輪村大泉に到着して小休止、午前8時に西箕輪村大萱(おおがや)を通過したあたりで休息を取り、この間食事を済ませ、梨ノ木、中条、平沢を経由して、小沢橋で3回目の小休止して、横山からやや登り坂になり、駒ヶ岳登山基地の内ノ萱(うちのかや)に着いたのは、午前10時半である。内ノ萱の発電所の隣の芝生で昼食を摂(と)って、よく身体を休めてから12時に出発。このあたりで原作では生徒たちのうち数名の個人的なことが語られるが、映画ではもちろんそのような詳細は省略されている。このあたりで原作では雨が降ったり止んだりを繰り返すが、映画では雨が降り出すのはもう少しあとになって伊那小屋に着いてからである。

1時間半の大休止のあと、一行はまた歩き出したが、「胸突き八丁」と呼ばれる箇所に来ると、登山道の様相ががらりと変わった。この登山で一番の急斜面を登らなければならないのである。赤羽校長が腰にぶら下げている鈴が鳴り響く中、岩の多い険しい斜面を一行は登って行く。途中で3人の登山者に会い、頂上の天候と伊那小屋のことを聞くが、3人は酒を飲んでいよう、伊那小屋のことで何か不安のようなものがよぎる。この「胸突き八丁」の急斜面を登り切ると、一斉に眺望が開け、頂上に来たような気分になった。しかし、そこは標高2600メートルの通称「行者岩最低鞍部」と呼ばれる箇所、ここまで来ればあとは尾根伝いの道を少しずつ登って行けばよいのであった。スクリーンに映し出されるここからの美しい眺望も見どころの一つである。赤羽校長が時計を見ると、午後3時であった。あたりはあまりにも静かなので教師3名は、余計に天候のことを心配する。「嵐の前の静けさ」といったところであろうか、じわりじわりと観客にも暴風雨の近づいていることを予感させて、スクリーン

に映し出される美しい景色に感動するとともに、一方ではどこか背筋が寒くなってくるかのような感じを与える場面である。

小休止のあと、いよいよその日の目的地である伊那小屋へ向けて、そこを出発する。林光の音楽とともに一行は尾根伝いに歩いて行くが、だんだんと霧も出てきて、風も冷たくて、寒い。生徒たちの中にはお腹の空いてきた者も出てくる。途中の濃ヶ池に辿り着いたところで、弁当を食べることにしたが、古屋(ふるや)時松という一人の生徒は食べたくないと言う。寒いのである。20分後にそこを出発して、伊那小屋めざしてまた歩き出した。林光の音楽とともに一行は霧の中を進む。「小屋はすぐそこだ」「もう一息だ」という教師の声に励まされながら、生徒たちは登山を続ける。駒飼ノ池に辿り着いたところで、霧はかなり濃くなってきた。「列から離れるな」の声の中、生徒たちは懸命に濃い霧の中で坂道を登って行く。

やっと目的地周辺に辿り着くが、しかし、小屋が見えない。「小屋がないぞ」と、生徒たちは叫ぶ。よく見てみると、石垣だけが残っていて、小屋は燃えてしまったあとのようであった。どうやらここまで来る途中の「胸突き八丁」で出会ったあの3人の仕業のようである。彼らが火をつけたに違いない。しかし、まだ石垣は残っている。赤羽校長は自分たちの小屋を作ることを提案して、ただちに青年会員たちにはハイマツの枝を切り取ってくるよう、そして生徒たちには屋根にのせる石を運んでくるようにと指示を出すと、皆はそれぞれの分担作業に取り掛かった。あたりはだんだんと暗くなり、風も強くなってきた。

やっとのことで自分たちの小屋が出来上がって、赤羽校長の「中に入れ」という声とともに、雷が鳴り響くとともに、雨が降り出した。雨は激しくなっていくようである。赤羽校長は「今のうちに食べたいものを食べ、身につけるものは身につけよ」という指示を出す。時刻は夕方6時半である。赤羽校長はマッチをすって焚火をしようとするが、一旦火がついたかと思うと、屋根から雨水がドッと落ちてきて、たちまち消えてしまう。皆はガタガタ震え出した。ここまでの登山の疲れから、眠くなってきた者もいる。「眠っちゃいかん。眠ったら死ぬぞ」「起きろ」の声に、生徒たちは懸命に目を覚まそうとするが、ひどく寒い中、睡魔に襲われてしまう。深夜の2時、赤羽校長はわざと木を火にくべて、煙を出すよう仕向けて皆を目覚めさせようとする。青年会員の一人は不平を言い出す。風雨はさらに激しく強くなっていく。赤羽校長は「風が強くなっているが、やがて嵐は去って、よい天気になるぞ」と皆を励ます。明け方4時には雹(ひょう)も降ってきた。「もうしばらく待ってくれ。必ず天気は回復する」赤羽校長の言葉に励まされながら、皆は懸命に耐える。

朝7時になって、征矢隆得と青年会員の一人が外の様子を見に出て行くが、戻って来ると、「とても歩けたものじゃない。小屋を守って、嵐と戦うしかない」との返事である。ところが、以前から体調があまりよくなかった生徒の古屋時松がガタガタ震え出して、懸命の介抱にもかかわらず凍死してしまった。この古屋の死から小屋の中の皆の反応が変わり始めた。真っ先に青年会員の一人が小屋を飛び出したことから、ほかの青年会員とともに生徒たちも小屋から飛び出して行った。この小屋の中にいたら、古屋のように凍死してしまうだけだと思ったからである。小屋から飛び出しても、誰がその校長の指示に違反する行為を責めることができようか。外に出た生徒たちは、激しい風で飛んでくる石が顔にあたって、顔からは血が出てくる。この場面は見るに堪えないほどである。

赤羽校長は死んだ古屋とともに小屋に残ろうとするが、征矢隆得や清水政治らに説き伏せられて、外に出た生徒たちを救い出すために出る決意をする。赤羽校長は古屋の死体の上に毛布をかぶせようとするが、清水政治が「この毛布はこれからも必要です」と言いながら、それを止めさせる場面は、複雑な思いにさせられる。外に出た教師らは生徒たちのあとを追う。清水政治は足を怪我して動けない荻原三平に出くわして、彼を背負って行く。征矢隆得は先頭にいる生徒たちを風の弱いところに誘導するために先を急ぐ。赤羽校長は唐沢武男が倒れているところにやって来るが、その生徒はすでに息を引き取ったあとだった。スクリーンではこの唐沢武男が激しい嵐で動けなくなって、意識が朦朧(もうろう)としてくる中で、よく晴れた日の運動会のと看の事を思い出す場面は、たいへん効果的である。スクリーン上の嵐と晴天がコントラストをなして、この生徒の悲惨な姿が余計に身に染みて、あわれでならない。

征矢隆得はわれ先に逃げ出そうとする青年会員を説得して、生徒たちの救出にあたらせる。そうしているうちに風の当たらない窪地に落ちると、そこにはかなりの者が避難していた。征矢隆得はその窪地からまた出て、嵐の中の生徒たちの救出に向かおうとするが、赤羽校長から救助隊を呼びに行くようにという指示が出されていることを知って、嵐の中を村に向かって駆け出した。彼は村に着くと、倒れてしまったが、休息を取ってから、午後4時、第一次救助隊とともにまた救出に向かった。

しかし、山上では嵐との格闘の末、堀峰、北川秀吉(ひできち)、有賀直治の3生徒がついに凍死してしまった。そこへ赤羽校長がやって来て、嘆き悲しむ。そのあと赤羽校長は荻原三平を背負っている清水政治と出くわすが、「岩陰に入って待っていてくれ」と指示してから、先方にいる生徒の救出に向かおうとする。赤羽校長の疲労ぶりから清水政治は、「これ以上無理です」と言って、引き留めようとするが、赤羽校長はこう叫ぶ。「私は行かねばならぬ。清水君、私は行かねばならぬのだよ」この場面での鶴田浩二の演技が見どころであろう。生徒1人1人に対する思いがこの言葉の中に込められている。感動の場面である。こうして出かけて行った赤羽校長は、嵐の中でブルブル震えていた平井実を見つけ、自分の冬シャツを脱いで、それをその生徒に着せてやった。その生徒とともにそこを立ち去るとき、赤羽校長は腰に下げていた鈴を落としてしまう。さらに進むと、途中で有賀邦美と有賀基広兄弟が倒れて死んでしまっているところに出くわす。

ここで場面は変わって、赤羽校長の自宅で妻つぎが有賀喜一から遭難事故の報告を受けている場面である。有賀喜一は伊那小屋で古屋時松が死に、唐沢武男も死んだこと、そして内ノ萱へは生徒11名が生還したが、残りの13名は不明であるという報告をした。この時点での凍死した生徒の数は2名であったが、妻つぎは「1人でも生徒を死なせた以上、夫は帰って来るはずはありません」と言って、覚悟を決めた。

場面はまた大惨事の起こった山上に戻る。第一次救助隊が「胸突き八丁」に到着したとき、赤羽校長はかすかに生きながらえているといったような状態であったが、隣にいる生徒の平井実はすでに死んでいた。救助隊を連れて来た征矢隆得が、先頭に立っていた子供たちは皆村に生還したことを伝え、赤羽校長は「うれしい」と言ってから、息を引き取った。上の方では小平芳造も死んだという知らせが入った。これで生徒は10名が犠牲となったことになる。

あと1人の生徒荻原三平は、教師清水政治に背負われて、ある岩陰に辿り着いていた。しかし、その岩の中には1人しか入れない。清水政治は三平を穴の中に入れて、自分は穴の外で寒さをしのいでいた。穴の中の三平はローソクに火をつけて、その火で餅を焼いてから、清水先生に差し出す。生徒と教師の心の絆が描き出されていて、そこはなおも寒い、心温まる場面である。さらに感動的なのは、そのあと東の山の上から太陽の光が射してきた瞬間であろう。清水政治の顔に太陽の光が射ってきて、太陽が昇ってくるのを目にしながら、「三平、俺たちは勝ったぞ」と叫ぶ。清水政治が三平とともに立ち上がって、御来迎に向かって手を合わせる場面は、この映画の中でも最も感動的な場面であろう。森谷司郎監督自身がこの場面について、「僕の25年間の映画生活の中で、あれほど感動したことはなかった」と語っている。雲海に浮かぶ東の山の向こうから太陽が昇ってくるこの御来迎の場面が、言うまでもなく、この映画で最も感動的であり、最大の見どころである。

学校の留守役を務めた有賀喜一は、山上から運び下ろされた赤羽校長と生徒の平井実の哀れな姿に対面する。赤羽校長の上着を開けてみると、下に着ていた冬シャツがない。その冬シャツは隣の生徒平井実の身体に着せられていた。この場面は台詞なしであるが、その台詞なしの中に有賀喜一の思いが込められていて、とても感動的である。

3) 遭難記念碑の建立

伊那駒ヶ岳登山で起きたこの遭難事故のことは、新聞で大きく報道された。赤羽校長のほかに生徒9名が犠牲になり、生徒1名が行方不明という大惨事となった。赤羽校長の自宅には石が投げ込まれるが、妻つぎはそれにじっと堪えている。そのような中、樋口裕一が赤羽家を訪れて、「春子のことがどうなろうとも、自分は登山に行くべきでした」と後悔する。自分も参加しておれば、少しは生徒を助けてあげられたかもしれない。それなのに自分は自分のことばかり考えて、春子とともに身を隠していた。このように彼は自分を責めるのであるが、このような樋口裕一に向かって、赤羽校長の妻つぎはこう言う。「あなたはいつも自分を責めすぎる。やさしさの上に強さが加わると、いい教師になると夫も申していました」赤羽校長は生徒の成長のみならず、若い教師の内面的な成長についても常日頃から見守っていたことがこの台詞からも明らかである。

征矢隆得と清水政治は「いいかげんな登山計画だった」と、郡の視学からひどく叱られるが、それに対して有賀喜一は2人をかばって言い訳をする。有賀喜一は当初は登山計画に反対していたが、今は以前と違うようである。赤羽校長の生徒に対する熱意に心を動かされたのである。ただ今回起きたこの遭難事故について、有賀喜一は報告書をきちんとまとめるように郡の視学から命じられた。征矢隆得と清水政治は村民から石を投げつけられたり、「人殺し」という罵声を浴びたりした。

犠牲者の村葬が行われることになったが、赤羽校長の妻つぎは犠牲となった生徒の遺族から、「子供を返してくれ」「人殺し」などの罵声を浴びるが、そのとき生還した生徒たちが立ち上がって赤羽校長の奥さんと娘2人(原作では子供たちは5人あって、6人目がまもなく生まれてくることになっている)をかばう。そのような中で葬儀は行われるが、それに参列している有賀喜一のもとに樋口裕一が自殺した知らせがもたらされる。原作では樋口裕一と水野春子は心中することになっているが、映画では樋口裕一が崖から飛び降りて自殺し、その崖に立って水野春子が泣き叫ぶ場面がスクリーンに映し出されている。その樋口裕一の遺書には「赤羽先生の心を示す碑が建つ」ことを願うような文言が書き込まれていた。この樋口裕一の言葉がのちに遭難記念碑建立のきっかけとなるのである。

葬儀のあと、有賀喜一は同僚たちに向かって、赤羽校長の最期について話し始めた。「赤羽校長は冬シャツを身に着けていなかった。それは生徒に着せられていた。理想主義もない、鍛練主義もない、凍え死ぬ前に一番重いのは、このシャツである。このシャツを脱げる心だと思いました」と、赤羽校長の行動を褒め称えた上で、さらに赤羽校長は日頃から学校に来られない生徒を自宅に呼んで個別指導をするとともに、自分の畑で作った米で生徒たちに温かい夜食を食べさせていたことを語る。しかし、そのような善意も、1人生徒を死なせてしまえば、いずれは忘れられてしまうことを有賀喜一は悲しむ。征矢隆得は責任を取って、学校を止めると言い出すが、清水政治は反対にこのまま泥をかぶったままの状態で止めるわけにはいかないと主張する。そのとき伊吹やえが樋口裕一の遺書の言葉を思い出して、「樋口先生は私たちの心で、碑を建てることを願っているのではないのでしょうか」と口にする。これがきっかけで教師たちは、遭難記念碑を建てることを考え始めるのである。

この遭難記念碑建立の中心となったのが、有賀喜一である。彼は郡教育会をひんぱんに訪れたり、また各学校の校長とも会って、遭難記念碑の建立を訴え続ける。「遭難慰霊碑でもない、遭難殉難碑でもない。遭難そのものを忘れないための遭難記念碑を建てたい」と主張するのである。しかし、彼はそうしているうちに疲労のためにもともと病弱な身体をさらに悪化させてしまう。最後に郡教育会でお偉方を前に交渉しているときには、かなり顔色も悪く、最悪の状態であった。ついにその場で郡長兼教育会長の鈴木庄之介(丹波哲郎)から遭難記念碑建立の承諾を得るのであるが、その瞬間、有賀喜一は気を失って倒れてしまうのである。

その有賀喜一の執念が突って、昭和3年8月15日伊那駒ヶ岳の遭難場所に遭難記念碑が建ち、その除幕式が中箕輪尋常高等小学校関係者立ち合いの下で執り行われた。その翌日、有賀喜一は死亡したという。それから12年後に修学旅行としての駒ヶ岳登山は再開されて、それは今も続いているという。その修学旅行のときにかつて行方不明になっていた唐沢圭吾の遺骨が発見された。映画のエンディングは現在の登山の様子がスクリーンに映し出される。これもすべて赤羽校長の心が反映された光景であるように思われた。

以上のとおり、この映画『聖職の碑』は単なる遭難事故の物語ではなく、登山という体験を通じて教師と生徒の心の触れ合いを描いたものであり、映画の前半で展開される実践主義教育と理想主義教育の対立は、現代の教育のあり方に何かを訴えかけていることは確かである。この映画を鑑賞して、教育とは何かを考え、反省すべき点は反省し、実践すべきことは実践していくことが大切である。最初から完全な教育というものはいない。常に何かを補い合いながら実践していくのが教育である。教育とは「ある」のではなく、「創り出していく」ものである。ただ赤羽校長がこの映画の中で主張しているように、「思想も考え方も時代によって変わる。しかし、体験が人間を作るといえることは、いつの世にも変わらない」のではないか。その体験の方法に最大の注意を払って、万全を期して上での体験教育を通じて、生徒の個性を伸ばしてやるのが、理想の教育であろう。実践主義教育でもない、理想主義教育でもない。いずれの考え方も尊重し合いながら、また社会の変遷にも対応しながら、よりよい教育方法を模索していくことが大切である。

新田次郎の原作小説『聖職の碑』もまたそれを原作とした東宝映画『聖職の碑』も私たちにそのように教育について考える機会を与えてくれる。ただ大切なのは、この原作や映画から受け身のかたちで何かを教えてもらうのではなく、積極的な姿勢で何かを学び取ることである。是非、この機会にいずれの作品も鑑賞して教育について考えていただきたいと思っている。

[メールマガジン「すだち」第96号本文へ戻る](#)

〔発行〕 国立大学法人 徳島大学附属図書館
Copyright (C) 国立大学法人 徳島大学附属図書館
本メールマガジンについて、一切の無断転載を禁止します
